

日本社会についての課題

本書の主題である日本社会についてはどうか。以上のように、「つながりの二つのかたち」ないし原理の両方が重要であることを踏まえた上で、現在の日本——本章で論じてきたように、「集団が内側に向かって閉じる」という、ムラ社会的な関係性が支配的であり、急速な都市化と高度成長の残滓から、古い共同体が崩れ個人が孤立してバラバラになっているという状況——において、明らかにいま強く求められているのは(B)の「つながり」の通路（独立した個人と個人がつながる）であるだろう。

これは、先に『稲作の遺伝子』と呼んだように、稲作の二千年に及ぶ歴史の中で、『場』を共有する人々の同調や一体意識」という関係性で十分やってこれた日本のような風土の社会あるいは日本人にとっては、途方もなく困難な課題であるに違いないが、これから数十年の日本社会にとっての最大の課題であると私は考えている。

この場合、私自身がポイントであると思っているのは、第一に、ごく卑近なレベルでは、「あいさつ」や御礼の言葉のやりとり、互いに道を譲るといった、日常的なレベルでの（特に言語を中心とする）コミュニケーションである。残念なことに、こうした「なじみのない他者」との間のコミュニケーションのための語彙が日本語では未成熟であり——実は「こんにちは」「ありがとう」といった言葉ですら、意外に新しい時代のものである——、この課題は、ある意味で日本語そのものの進化あるいは変容を要請するものかもしれない。

第二に、より根底的には、普遍的な「規範」の確立という点である（この点は最終的には第一の点とも深く関連し合っている）。これは、『その場その場の人々との関係で調整する』という形で物事に対応してきた日本人にとっては、もともと苦手とする課題であると思われるが——ある程度小規模の、閉じた「集団の中では」「個々の場面ごとの、関係による調整」のほうがかかるにスムーズであり効率的でもある——、都市的な関係性、ある

いは「異なる集団」に属する人間同士がコミュニケーションを行っていく場合にはもつとも本質的な基盤をなすものである（先ほど述べた「普遍宗教」は、そうした規範原理をその中に含むものであった）。象徴的に言えば、普遍的な「規範」の存在が、独立した個人と個人をつなぐいわば「通路」の役割を果たすのである。

しかも、この点は意外に気づかれにくい点なので強調しておきたいのだが、そうした「普遍的な規範」が明確に存在する社会は、意外にも、人々にある種の「自由」をもたらすのである。なぜなら、そうした規範の領域はしっかりと遵守すべきものとされる一方、それ以外の個々の場面の行動は、逆に「個人の自由の領域」として明確に確保されるからだ。

裏返して言えば、「個々の場面ごとの、関係による調整」というやり方は、集団あるいは社会の規模が一定以上のものになると、かえって限りなく「窮屈」な——場合によっては抑圧的ともいえる——ものになるのである。

現在の日本はこうした一つの典型ではないかと思われる。日本社会は、明示的な「禁止」や規範といったものは、むしろ非常に少ない社会である。そのぶん、個々の場面での人と人の「関係」によって物事が律せられるのであり、それが同時に様々な「しがらみ」や「世間体」といった形で人々の意識の中に沈殿し、漠然とした形で行動をこまごまと規定している。

以前にも何度か書いたことがある話であるが、ある時テレビで「ひきこもり」状態にあったという二十代の女性のインタビューが紹介されていたとき、彼女が（当時の）自分の心の状態を「透明な真綿で全身を軽く圧迫されている感じ」というように表現していたのが印象に残った。この「透明な真綿」とは、「個々の場面ごとの、関係による調整」によって律せられるような社会のもつ窮屈さや抑圧性——明確な規範やルールは存在しないが、「目に見えない」多くの微細な拘束が存在するようなあり方——を象徴的に示している。

以上のような意味で、現在の日本社会において特に求められているのは、先ほど「つながりの二つの形」の(B)として示した、「独立した個人としてつながる」という通路（個人をベースとする公共意識や言語化された規範原理）である。